

## 特別講演

# じょうぶな頭、しなやかな心

## ～子どもたちの生きる力、本当の自立のために必要なこと～

品川 裕香 (教育ジャーナリスト・編集者)

児童虐待に関する米国の論文を読んでいてAD / HD (注意欠如・多動性障害)という言葉に初めて出会った。1991年のことだ。以来、子どもたち取材し続け、気がついたら四半世紀にならんとしている。この間、発達障害という概念が広まり、教育現場が変わり、制度や法律も整備された。しかし、最近、「なぜ教育するのか、今一度、原点に立ち返る必要があるのではないか」との思いを強めている。

というのも、学齢期に診断されたという発達の課題を持つ若者たち取材していると、中学校・高校以降で、あるいは社会に出てから不適応を起こすケースが年々増えているような気がしてならないからだ。取材時、よく耳にするのは「AD / HDだから約束を忘れてたりするのは当たり前」「アスペルガー症候群の自分に(職場の人が)空気を読めと言ったり、わかるように指示しないのは障害者差別(だから訴えたい)」等々の言葉。さらに深く聞いていくと、少なくない人たちが「自立したいのにできない」「社会参加したいのにできない」といった戸惑いや不安を口にし、「今の自分がうまくいかないのは〇〇(保護者や教師)のせい」などと怒りを露にする。しかし筆者が「障害があっても、自立し社会参加するためには守らなければならないルールや倫理、規範

がある」というところから説明すると、一様に「障害があるのにできるようになるのか?」と質問攻めにあう。そのたびに、障害名や障害特性は知っていても、自身の課題に対して最善の解決策を求める力など自立し社会参加するための「じょうぶな頭」、すなわち、学業成績のよいいわゆる「かしこい頭」ではなく、生きていくため、本当に自立するために必要なライフスキルが身につけていないのではと思わざるを得ない。

筆者は、このような自立や社会参加への不適応に対して、犯罪学や犯罪者処遇論などにヒントがあると考えている。たとえば、犯罪学では逸脱行動をリスク要因と保護要因という二つの領域から考え、反社会的行動や非社会的行動を取らず、人生を自由に生きていけるようになるためには変えられるリスク要因を少しでも減少させ、保護要因を一つでも多く準備することだとしている。そして、たいてい人はリスク要因を数多く持っていても、保護要因を重ねることでresiliencyがつき、人生を生き抜いていけると証明している。

そこで、そういった犯罪学的知見から、障害の有無や、生まれた環境の良し悪しに関わらず、子どもたちが「しなやかな心」を育て、自立し社会参加するために必要な力を養うにはどうしたらいいか紹介する。

### 〈プロフィール〉

品川裕香(しながわ ゆうか)兵庫県生まれ。早稲田大学法学部卒業。国内外の教育現場(いじめ・不登校・虐待から特別支援教育、非行など矯正教育まで)や子どもたちの思いを多角的に取材執筆。著書に『若い人に贈る読書のすすめ2014』(読書推進運動協議会)に選定された『働く』ために必要なこと:就労不安定にならないために(筑摩書房)、日本にディスレクシアを紹介した『怠けてなんかない!』シリーズ(岩崎書店)、『いじめない力、いじめられない力』(岩崎書店)等。文部科学省中央教育審議会教育課程企画特別部会委員。元内閣教育再生会議委員。

